

環境史・災害史研究と考古学

フィールドスタディー「旧上野国・鎌原村周辺の歴史を訪ねて」

講師の宮瀧交二大東文化大学文学部准教授



いよいよ高坂駅からバスに乗って出発進行！

途中、横川サービスエリアで休憩です



ミドリのバスです

浅間山



左が軽井沢、右が鎌原村方面です







こちら方向が鎌原村方面



周辺ガイドマップ



▲西阿山



▲バラギ湖



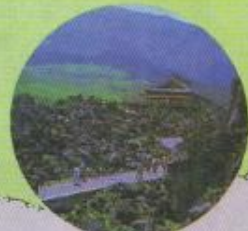
▲万座温泉



▲いごいの広場



▲キャベツ畑



▲鬼押し



土石流



▲鎌原観音堂

146

144

至東部町

至小窪

至軽井沢

至中軽井沢

峰ノ茶屋

白糸の滝

分去茶屋

なごの原(六重ヶ原)

桜峯地蔵

狩宿開所跡

狩宿敷田

吉森

袋倉

ふくろくろ

丹生田

今井

半田菜

羽根尾

はねお

くまおおつ

案内所

西久保

西原城址凸

大前

おおほえ

鎌原観音堂

鎌原

道標

龍泉堂

田代

田代湖

高野峠

室上田・菅平

山の丸山

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

至小窪

至東部町

鎌原(かんばら)観音堂に到着/天明三年浅間やけ遺跡とある



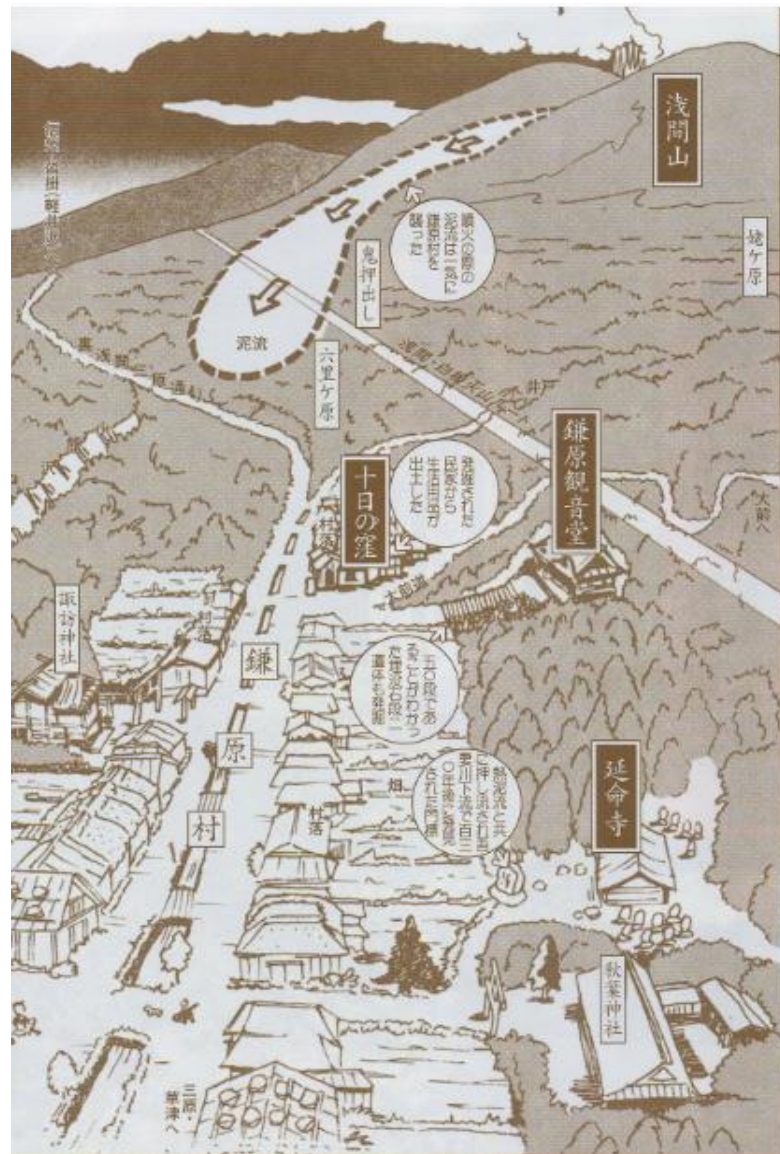
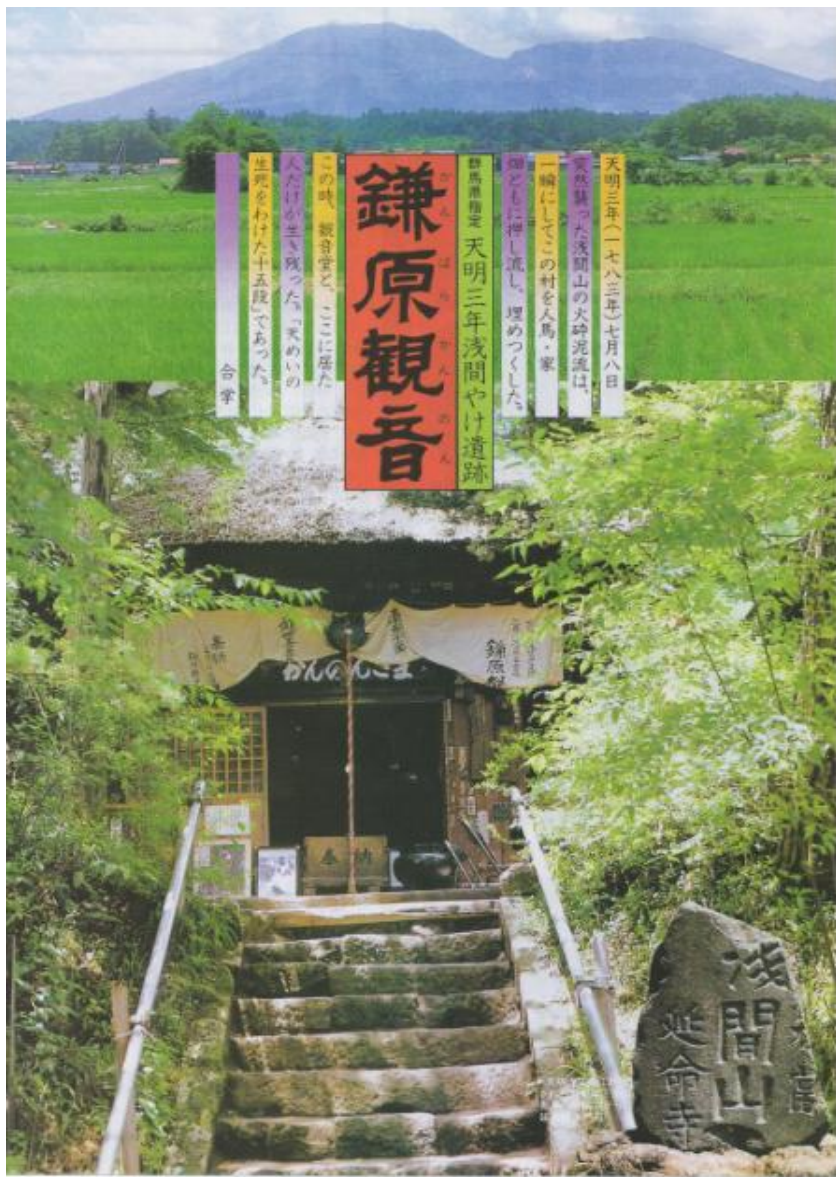
鎌原観音堂入り口(ここから歩いて下って1分で観音堂に至る)



「日本のポンペイ」とある



被害の起こり方としてはポンペイは火山灰に埋もれたのだが、ここは「土砂なだれ」に埋まった



鎌原観音堂



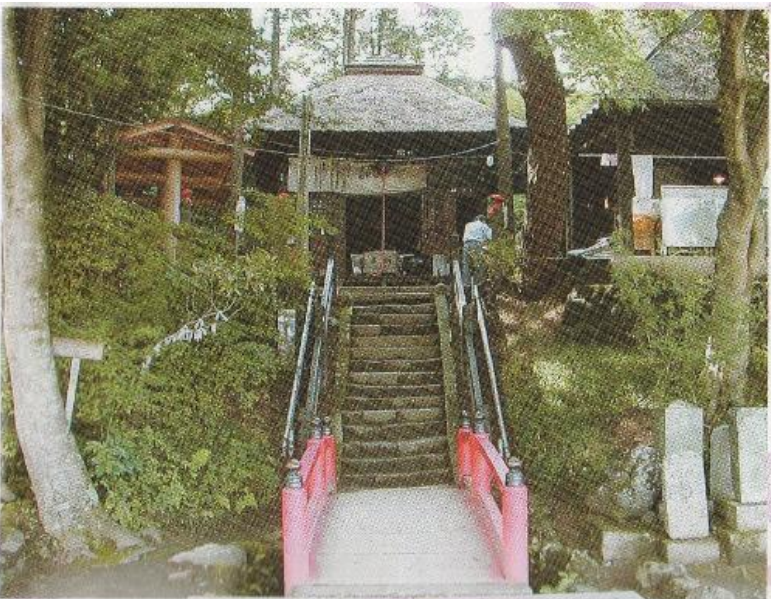
正面の石段は15段であるが元々は50段であった(下の35段は「土砂なだれ」に埋まった)

かんぼらかんのしんどう
鎌原観音堂

十一面観音菩薩を本尊とし、鎌原村の西方の高台に建つ鎌原観音堂。鎌原村が開かれたとき、村人の祈願所として建てられたもので、大同元年（八〇六）の創建と伝えられている。現存するカヤぶき屋根のお堂は、正徳三年（一七一三）に名主、鎌原市左衛門によって建立されたものである。

戦国の世にあつては、鎌原城主の出陣に際し戦勝を祈願。江戸時代になると街道が整備され、この村は北国街道の脇往還・大笹道の数少ない宿駅になった。観音堂もまた、荷役や農耕に大切な馬の安全祈願所として村人に親しまれるようになった。

このように宿場村として賑わいをみせていた鎌原村。天明三年（一七八三）頃の戸数は一一八戸、人口五七〇人。牛馬の数も一六五頭であつた。



鎌原観音堂と埋没した石段

天明三年八月五日
昼四ツ半(午前十二時)

「鳴り音は静かだった。突然熱湯が一度に水勢百丈あまり、山からわき出し、六里ヶ原一面に押し出した。神社、仏閣、民家、草木すべて一押しに流し去り吾妻川沿岸七十五カ村の人馬を残らず流失させた。」(無量院住職手記) 浅間山より多量の「土石なだれ」が発生し、時速百kmの猛スピードで鎌原村を襲った。

当時、人々は焼け石が空から降ることを恐れ、土石なだれには全くの無防備だったうえ、不幸なことに森に囲まれた窪地の村人は浅間山の見通しが決してよくなかった。村人が異様な音と地鳴りに気づいたときは、土石なだれは目の前に。火口から村までわずか十一、二分のことだった。人・馬・家・田畑もろとも、一瞬にして押し流され、窪地の村は5mもの土石に埋め尽くされた。

鎌原村全一一八戸が流失、死牛馬一六五頭、死者四七七人。石段を駆け上がり観音堂の境内にたどりついた者と、たま村外に出ていた九三人が奇跡的に助かった。土石はその足下に追ったが、石段を十五段だけ残して止まった。

生存者九十三人は隣村の暖かい援助に支えられながら押し埋められた村を再建、今日を迎えられたのだ。また、村人の命を救った鎌原観音堂は、厄除け観音として、厚く信仰され、地元観音堂奉仕会により、毎日ご先祖様の供養が行われている。



石段二遺体の復顔像

三十三回忌供養碑



このような「災害碑」が人間の英知を伝え、これからの生き方に指針を与えてくれる



つよこい文化館めぐりコース案内図

観世音菩薩







熱泥流と共に押し流され吾妻川下流で百三十年後に発見された門標







二百年忌供養聖觀音像



観音堂/1713年建立











15段しか残っていない階段



橋の下には、あと35段続いていたのだが



浅間山（標高 2568 m）の天明三年（1783）の大噴火は、古文書や絵図に噴火や被害の詳しい状況が残されている。ここでは、天明噴火時の被害とその後の復興状況を振り返ってみよう。

天明三年（1783）の噴火^{1) 2)}は、5月8日（四月九日）に始まり³⁾、連日のように多量の降下軽石（浅間A軽石）を噴出し、関東地方に重大な社会的混乱を引き起こした。噴火の最末期の8月4日には吾妻火砕流、8月5日（七月八日）には鬼押し溶岩流と鎌原土石なだれ⁴⁾が噴出した。

鎌原土石なだれは、浅間山北麓の鎌原村（高台にあった観音堂を除いて）を埋没させた後、吾妻川に流入して天明泥流となり、吾妻川や利根川沿いに死者1,400名以上の大規模な災害を引き起こした。この一連の土砂移動現象は、100km以上も下流まで流下していて、浅間山で発生した他の噴火現象とはかなり異なっている。天明泥流は浅間山北麓から吾妻川に流入して、吾妻川・利根川を流下し、利根川河口と江戸川河口まで達した（図 2.36、2.37）。

2.3.1 鎌原土石なだれ

発掘調査が実施された⁵⁾。鎌原観音堂下の階段は現在地上部分が2.5 mである。発掘してみるとその下に5.9 mの階段があり、土石なだれの堆積物で覆われていた（図 2.33）。堆積物の中には高温だった溶岩塊（鎌原石）は少なく、埋蔵物はあまり焼けていなかった。観音堂を襲った土石なだれが1991年の雲仙のような火砕流だったとしたら、観音堂に集まって祈祷していた住民は全員死亡していたであろう。

天明噴火前の浅間山北麓の半円形の凹地付近には柳井沼と呼ばれる湖沼があって、周辺にはかつら井戸・用水などの湧水地や沼地を示す地名が読み取れる。現在でも鬼押し溶岩の末端部には孀恋村の水源地があり、湧水が多く湿地状となっている。

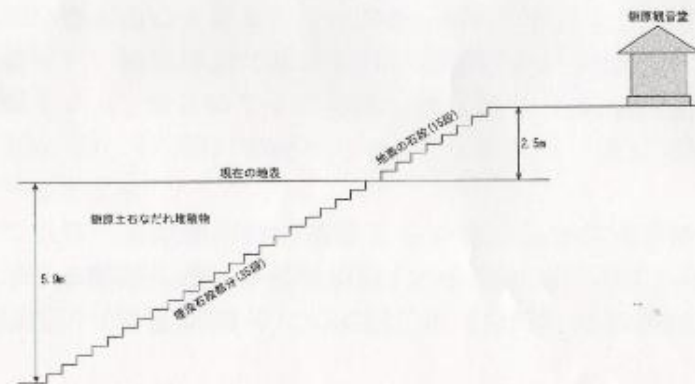
浅間山の北麓で実施した調査ボーリング（深さ72.6 m）によれば、地表から64.8 mもの厚さで鬼押し溶岩が存在し、鬼押し溶岩を取り除くと深い凹地となっていて、噴火前の柳井沼がこの付近に存在したらしいことが判明した⁶⁾。噴火後に被害調査を行った幕府勘定吟味役の根岸九郎左衛門は『浅間山焼に付見分覚書』⁷⁾の中で以下のように記している。「今回の浅間山焼について、押し出してきた泥石がいずれから涌出したかを多くの領民に尋ねてみた。しかし、山頂の御鉢と呼ばれる火口から涌こぼれたという者もあれば、中腹より吹破れたという者もいて、どちらか決定できなかった」。

地質調査の結果などから判断すると^{2) 6)}、鎌原土石なだれは火山体の地下から噴出した高温の本質岩塊が火山体

鎌原土石なだれは、最後に山頂から噴出した鬼押出し溶岩流に覆われ、上限がどこまで分布しているかよくわからない。鬼押出し溶岩流が広く分布する長野原町立浅間火山博物館の鬼押出し遊歩道付近には、直径700mの半円形の凹地が存在する。図2.32に示したように、鎌原土石なだれはこの凹地から北北東方向に30度（山頂からだど18度）の範囲にしか分布していない。土石なだれの中には高温のマグマが冷えて固まった巨大な岩塊（真っ黒な溶岩で鎌原石と呼ばれている）が数多く存在する。

北麓の鎌原観音堂や延命寺付近では1978年より詳細な

図 2.33.a 鎌原観音堂の発掘された埋没階段
fig. 2.33a Buried stairway of the Kambara Kannon Hall



の斜面を高速で移動した時に、北麓斜面を激しく浸食し、そこにあった水分や土塊を取り込み流下した可能性が強い。

従来の研究¹⁾では、土石なだれの噴出箇所は山頂火口と考えられているが、

- ①山頂からの噴出物質が柳井沼に流入し、柳井沼周辺の水や土石と一緒に流下した、
 - ②中腹の凹地（柳井沼付近）から側噴火し、柳井沼周辺の水や土石と一緒に流下した、
- の2通り（図2.34、2.35）の噴出過程が考えられる^{2) 6)}。

図 2.33.b 鎌原観音堂で発掘された人骨（荒牧重雄撮影）
fig. 2.33b Skeletal remains excavated at the Kambara Kannon Hall



孀恋郷土資料館





群馬県渋川市中筋遺跡





中筋遺跡位置図

渋川市中筋(なかすじ)遺跡



榛名山の大噴火による火山灰により埋没していた古墳時代の竪穴住居跡

復元された竪穴住居





なま ずじ い せき
 県指定史跡 **中筋遺跡**

大昔のある秋、榛名山が大噴火した。流れ下った火砕流は山麓のムラを襲い、分厚い火山灰の下に埋めつくしてしまっ

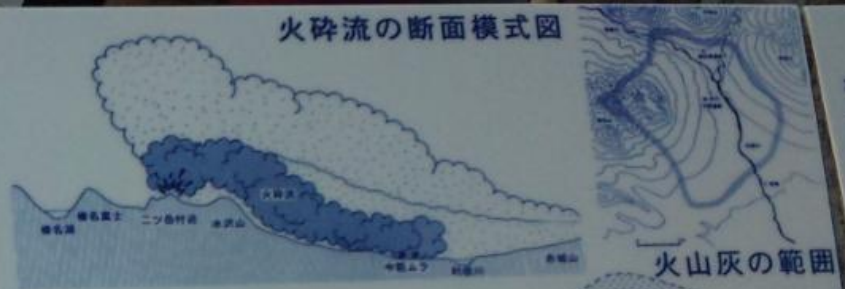
た。古墳時代中ごろのことである。

それから約1500年、発掘された遺跡からは、住まい、畑、垣根、まつりなどの跡が生々しく出現した。この遺跡では、火山灰に覆われていたために、普通は残らない多くのことが明らかになっ



火砕流写真 長崎新聞社提供

火砕流の断面模式図



火山灰が見えて、風がよす

古墳時代遺構全体図



火山灰の下から垣根でかこまれた、現在の1軒の屋敷と思われる建物群が発見された。垣根の中には竪穴式と平地式の住まいなどが同時に存在して、周囲に畑・祭祀場があることなど、黒井峯遺跡とともに屋敷とムラのようなすがわかる、全国で初めての発見だった。

中筋ムラのくらし



竪穴式住居は土屋根だった



① 竪穴式住居の場所を選ぶ。竪穴を掘りはじめる。



② 竪穴を深さ70cm前後掘り下げる。



③ 地表面で屋根を作る。屋根組み(垂木・横木)の上にカヤ材を交互に敷く。土屋根の下地である。



④ 取り置きしていた土を屋根の垂木尻を固定させるために土を土壁状に寄せる。これが周境帯である。屋根の下地に土を敷き始める。

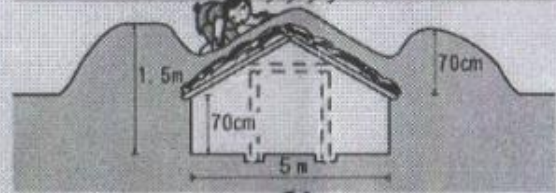
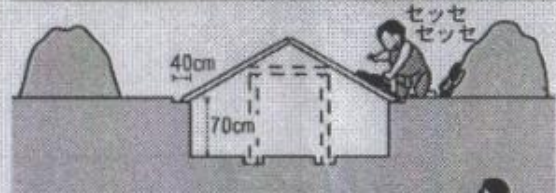


⑤ 土を10cm位の厚さに均等に敷せる。



⑥ 中筋型竪穴式住居の完成
土屋根の上にさらに草葺きする。
※土屋根は現在の建築材でいうところの断熱材である。草と草に挟まれた断熱材。

▼総合説明板④



竪穴式住居は 土屋根だった!!

- ①竪穴式住居の場所を選ぶ。
竪穴を掘りはじめる。
- ②竪穴を深さ70cm 前後掘り下げる。
- ③地表面で屋根を作る。
屋根組み（垂木・横木）の上にカヤ材を交互に葺く。土屋根の下地である。
- ④仮り置きしていた土を屋根の重木尻を固定させるために土を土壘状に寄せる。これが周堤帯である。屋根の下地に土を乗せはじめる。
- ⑤土を10cm 位の厚さに均等に乗せる。
- ⑥中筋型竪穴式住居の完成
土屋根の上にさらに草葺きする。
※土屋根は現在の建築材でいうところの断熱材である。草と草に挟まれた断熱材。



祭記

この大まな祭壇は、
近年の調査により、
その構造が明らか
になった。その
中心部には、
石製の祭壇が
あり、その周囲
には、土製の
祭壇が並ぶ。祭
壇の周囲には、
石製の柵があり、
祭壇の中心部
には、土製の
祭壇があり、



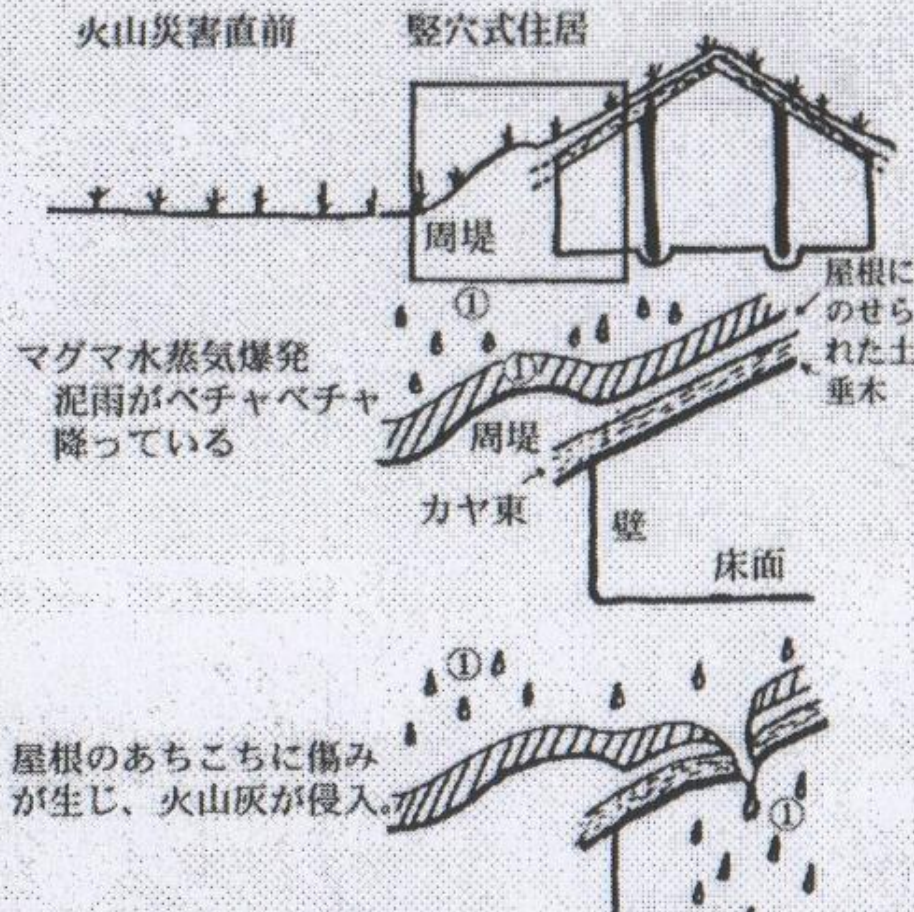
この他に、祭壇の
周囲には、土
製の祭壇と
石製の柵が
あり、祭壇の
中心部には、
土製の祭壇が
あり、

火山灰による遺物埋没過程 2号型穴式住居内埋積 火山灰新蓋割取層

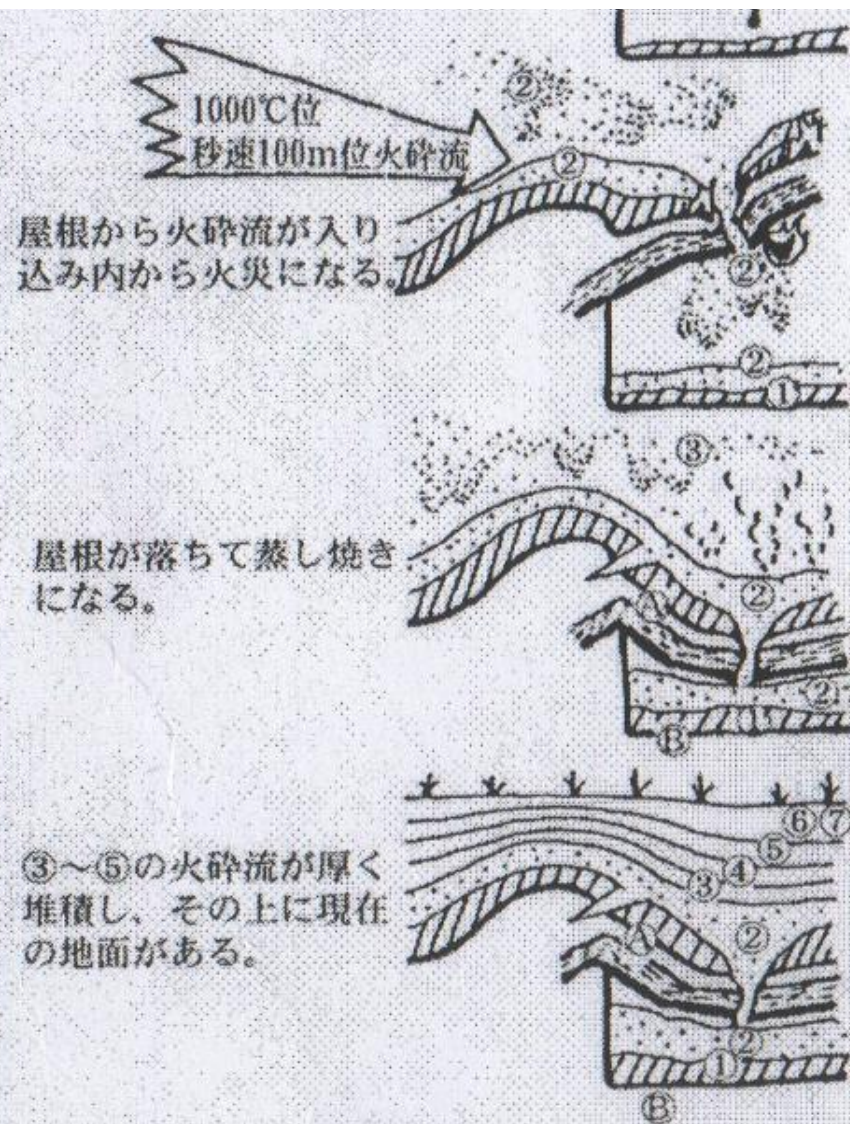


火山灰による建物崩壊過程

2号竪穴式住居内堆積火山灰断面剥ぎ取り層



⑦1450年くらい前に榛名山が噴火した ときの火山灰
⑥黒井峯遺跡地表面
⑥は50年くらい火山活動は休止 ⑤火砕流
④に伴う降灰層
④火砕流



③火砕流	③に伴う降灰層
②火砕流	②に伴う降灰層 燃えた木
①マグマ水蒸気爆発の灰 ①～⑤は1500年くらい前に榛名山が 噴火したときの火山灰	
A 竪穴式住居の土屋根	中筋遺跡
① 竪穴式住居の床	



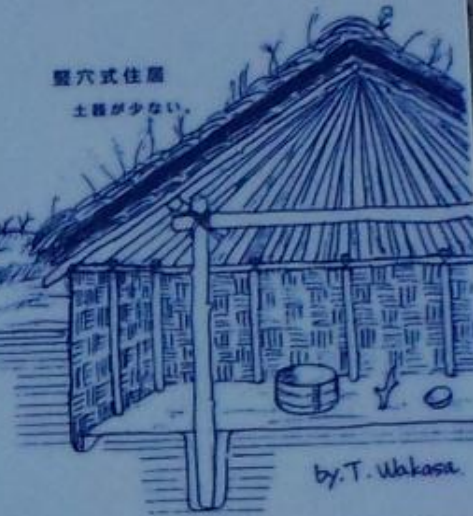


平地式住居
土器が多い。



ある秋・中筋ムラ
.....噴火前のような

竪穴式住居
土器が少ない。



by T. Wakasa



畑で収穫する。

夏と冬で住居を住みわけていた！



夏は涼しい平地式住居



冬は暖かい竪穴式住居

このことは、つぎの事から考えられます。
①煮たきのためのカマドが竪穴式住居、平地式住居両方にある。
②竪穴式住居は雨と夏の湿気に弱い構造である。
③北方民族（アイヌ等）の民俗事例で竪穴はその家、平地は夏の家としている。



今から1500年前の秋、榛名山が大噴火して、流れ下った火砕流が一瞬にしてムラを襲い埋めつくした。



県指定史跡

なかすじ
中筋遺跡

群馬県教育委員会
渋川市教育委員会

- | | |
|----------------------|---------------|
| ① 平地式建物
内部展示 | ⑨ 周堤帯 |
| ② 平地式建物
壁のつくり方展示 | ⑩ 垣根展示 |
| ③~⑤ 竪穴式住居
③のみ内部展示 | ⑪ 大きな祭祀場展示 |
| ⑥ 竪穴式住居の廂屋 | ⑫ 古墳 |
| ⑦ 屋根断面展示 | ⑬ 火山灰断面剥ぎ取り展示 |
| ⑧ 小さな祭祀場展示 | ⑭ 説明板 |

さあ、バスに乗って岐路につきましょう

